

平成30年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

平成30年度 岸本国際交流奨学金
世界保健機関（WHO）本部 インターンシップ報告

平成30年7月20日

大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座 公衆衛生学教室
修士課程2年 K.Y

【目次】

1. WHO本部（ジュネーブ）への派遣日程
2. インターンシップ派遣の経緯
3. インターンシップのテーマと背景
4. 今後の日本の情報共有の在り方の検討
5. 今後の目標



世界保健機関（WHO）本部



WHO 総会の様子

1. 世界保健機関（WHO）本部への派遣日程
平成 30 年 3 月 26 日～6 月 29 日（70 日間）

主な業務：

- ・ PND（Prevention of Non-Communicable Diseases）部門 Health Promotion Unit の業務
- ・ WHO 総会への参加
- ・ ランチタイムセミナー、インターン主催のブレインストーミングへの参加
- ・ インターンボードへの参加
- ・ WHO 日本人職員と厚生労働省職員の交流会への参加



PND 部長 ベッチャー氏 ランチタイムセミナーの様子

2. インターンシップ派遣の経緯

2015年度より、公衆衛生学教室では年間約2名ずつ、WHO本部PND（Prevention of Non-Communicable Diseases）部門にインターンを派遣している。これは、国連における国際保健の専門家の役割を学ぶ機会となっている。スーパーバイザーの指示のもと、Health Promotion Unitの業務である、職場におけるヘルスプロモーションの展開や、commercial determinants of healthのinformation noteの作成に従事していた。



同じユニットのインターンと一緒に

インターンボードの活動

3. インターンシップのテーマと背景

インターン期間中の主な業務は、発展途上国の政府が推進する職場のヘルスプロモーションのサポートと、将来的にWHOのHPに掲載予定のcommercial determinants of healthのinformation noteの作成をすることだった。このような業務を依頼された背景には、私が大学院入学前に、7年間産業保健師として職場のヘルスプロモーションの展開に関わっていたことが挙げられる。また、information noteの作成は、今後の社会状況の変化を予測しニーズを捉え、Health Promotion Unitが貢献できることを示すために行った。

4. 今後の日本の情報共有の在り方の検討

日本の公衆衛生活動は、戦後から高度経済成長期を経て、ダイナミックに変化している。ゼロベースから現在の形にまで発展してきた経験は、中所得国、低所得国に対して具体的な良い例となることが多い。その一方で、これらの経験は国内では情報共有が行われているが、海外に対しては十分に情報共有がされていない。WHOの業務では、HPを利用して海外の資料を探ることがあるが、日本の資料は日本語のものが多く、これまでの経験をシェアできないという問題がある。更に、体系的な分かりやすい資料にまとめられていないことがあり、他の国の資料と比較すると分かりにくさを感じることもある。また、このような経験を経てきた国はあまりないため、他の国から理解されにくい側面がある。米国、欧州以外の異なる文化を持つ先進国として、日本が国際社会に貢献できることは多いが、情報をシェアする方法が問題となっている可能性がある。その為、この情報共有の在り方について検討する必要があると考える。

5. 今後の目標

今回のインターンシップの経験を通して、国際保健で働く上で足りないものと、自身の背景による強みを理解することが出来た。この経験を教室のメンバーや、国際保健に関心がある人にシェアすることと、そして、次にWHOにインターンに行く人に有用な助言をしたいと考えている。更に、WHO本部、WPRO、神戸センターとの連携強化を促進し、今後も阪大からインターンを継続的に受け入れてもらえるようにサポートしたいと考えている。

自身の今後の研究は、WHOやUNICEFが保有している公開データベースを活用して研究を進めていきたいと考えている。

謝辞

WHOでのインターンシップは、視野を広げる経験となり、大変有意義なものになりました。経験だけでなく、インターンの友人やお世話になったWHO職員の方との縁が出来ました。岸本忠三先生、医学系研究科、国際交流ご担当の先生方、磯博康教授、公衆衛生学教室の先生方、教室秘書の方々、院生の皆様に心よりお礼申し上げます。